

つばめが運んできてくれた幸せ

総社市立清音小学校

三年生 椎葉篤規

六月十一日の朝、お父さんがさげんだ。

「のり、つばめがうちにすを作っているぞ。」

ぼくはあわてて外に出た。お父さんが指さす方を見ると、家の二階のまどわくに、たしかにつばめがすを作っている。下にはすなやえだがたくさん落ちている。二羽のつばめがそばに見えた。「やった。」とぼくはガッツポーズをした。でも、同時に心配にもなった。なぜなら、少し前に庭にすめがすを作ったけど、いたちにおそわれて死んでしまったからだ。

ぼくの家族はつばめが大好きだ。毎年春になると、つばめが来てくれないかなあと空を見上げていた。今年もだめかとあきらめていたときに、つばめがすを作ってくれた。きせきだと

思った。ぼくたち家族はその日からつばめのかんさつをはじめた。

つばめのすはとても高い所にあって、直接見ることはできない。ぼくとお母さんは、図書館でつばめの本をたくさんかりてきて読んだ。ますますつばめについて知りたいと思った。

最初は、つばめはすにいないことが多くて何をしているのかよく分からなかった。いたら安心、いなかったら不安。ぼくたち家族の気持ちは、つばめにぐるんぐるんとふり回される。六月半ばをすぎるとつばめがすの中でじっとしている日が多くなった。もしかしたらたまごを温めているのかもしれない。今度はぶじに生まれますようにと、いのる気持ちになった。

七月になると、すの様子がかわってきた。二羽のつばめがすを行ったり来たりしている。ひなにえさをやっているみたいだけど、ひなのすがたも見えないし、鳴き声も聞こえない。「今日ひな見えた？」が家族の会話になった。もやもやした気持ちの数日後、ひなのくちばしがやっと見えた。三羽だ。大よろこびした。

ひなはどんどん大きくなっていく。毎日、すを見るのが楽しくてたまらない。親つばめはせつせとえさを運んでくる。親つ

ばめが見えると、ひなはいっせいに鳴いて口を開ける。本当にかわいい。ぼくは一人っ子だけど、弟や妹が生まれたような気持ちになった。

ひな三羽にぼくは名前をつけた。一番大きくていばっているのが「大兄ちゃん」、次に大きくてこうき心が強いのが「中兄ちゃん」、一番小さくてのんびりしているのが「小兄ちゃん」だ。えさを取り合ったりけんかをしたり、まるで人間の子どもみたいだ。

七月半ばごろから、親つばめだけでなく他のつばめもえさを運んでくるようになった。すの前で羽をバタバタさせるとび方を教えている。せっかく教えてくれているのに、ひなはえさにむ中で知らんぷり。「練習しないと後でこまるぞ。」と思っただけ、ちよっとぼくににいてニヤニヤしてしまった。でもだんだんひなもやる気が出てきて、一生けんめいまねをするようになった。羽の動きは日に日にはよくなっていった。

ぼくは本当に幸せだった。学校に行くときも、帰ってきたときもひなにあいさつをして手をふった。ひなも何となくうれしそう。大きくなって、もうすがきゆうくつになってきた。ぷりぷりのひなが本当にかわいくて、できることならそっと手に乗

せてなでてみたいと思った。

でも、さよならはとつぜんやってきた。七月二十二日の早朝、今まで見たことないぐらいたくさんをつばめが、すの前をグルグルとんでいるのがまどから見えた。まるで映画のワンシーンのようだ。ぼくは急いで外にとび出した。すを見上げると大兄ちゃん一羽しかいない。「練習さぼっていたからなあ。」と思っていたら、決してかっこよくはないけど、よろよるととび立って向かいの電線に止まった。そこには親つばめと中兄ちゃん、小兄ちゃんがいた。それを見とどけると、なかまのつばめは南の空にとんでいってしまった。夕方、すにはつばめはいなかったけど、電線に止まっているのが見えた。ひなは、まだとび方が下手でへろへろという感じた。あれで本当に東南アジアに行くのか心配になった。

次の日、つばめはどこにもいなかった。空っぽのすをお母さんと見上げた。ぶじに旅立ったよろこびよりさびしさの方が強かった。

「のりもいつか家を出ていくんだよね。」
お母さんがポツリと言った。びっくりして、
「ずっと家にいたいよ。」

と、ぼくは言った。するとお母さんは、

「家を出るかは分からないけど、旅立ちの日はかならず来るのよ。」

と、今度はわらってだきしめてくれた。

つばめがすを作る家には幸せがやってくるというのは本当だ
と思う。ぼくたち家族は、つばめが来てくれるから本当に毎日
楽しかったし、旅立った今も春を楽しみに毎日をすごしている。
親つばめやなかまのつばめを見て、お父さんやお母さんの気持
ち、まわりの先生や友だちの気持ちも考えることができた。今
はまだへろへろのひなだけど、いつかぼくも成長して世界に旅
立ちたいと思う。